

# オバマの医療改革

天野 拓著



米国の医療費の伸びが50年ぶりに鈍化したことが昨年大きなニュースになった。リーマン・ショック後の不況の影響だけでなく、オバマケアの成果もあると言われている。米国の財政赤字の最大の要因は医療費で、このニュースは財政学者を巻き込んだ議論になるほどであった。もっとも2010年3月に法律が成立したオバマ政権による医療改革は、まだ道半ばであり、その評価は、今後の学術的な分析などに委ねられる。

さて、そのオバマケアと言われる医療制度改革とは具体的にどのような改革なのか、クリントン政権の時の違いは何か、関心はあるが実は良くわかっていないという方も多い

## 国民皆保険めざす取り組みを詳述

と思う。米国ではいくとも国民皆保険制度を導入しようという取り組みがあったが、「社会主義化された医療」に繋がる危惧から共和党や米医師会をはじめとする利益団体の激しい反対などで国民皆保険制度改革は頓挫してきた。本書はオバマ政権

が、民主党と共和党の対立だけでなく、民主党内の対立をどのように調整し、改革へと導いたのか、歴史的な経緯も踏まえて記述する。戦後アメリカ政治思想史としても興味深い。本書から読み取れるオバマケアのキーワードの一つは、「税額控除」

(勤草書房・3800円)  
▼あまの・たく、71年生まれ。熊本県立大准教授。専門は政治学、医療政策。慶大大学院法学研究科後期博士課程修了。著書に『現代アメリカの医療政策と専門家集団』など。

である。既存の雇用主が提供する民間中心の医療保険を重視し、保険料の一部あるいは全額を税額控除することで、無保険者が医療保険に加入することを奨励する仕組みだ。そして何よりオバマケアの真骨頂は、単に医療費の伸び率を抑制するだけでなく、医療の質の向上を目指す工夫が数多く導入されていることだ。著者は米国の医療制度を商業化された医療と危惧し、医学知識のない個人が広告やマーケティングに影響を受けて、新薬、診断テスト、画像検査法、手術などの高価な診断や治療法を過剰に利用する傾向にあることを指摘している。公的皆保険制度が整備された日本でも同様の問題が起きているといえるのではないか。

本書では1997年に導入された財政均衡法にも何度も触れていることも重要な視点である。米国は、財政健全化と医療の質向上との両立に向かって大きく踏み出したのである。

《評》一橋大学教授 井伊 雅子